

オーディオ

ただ懐かしいだけでは
僕らの音楽シーンを
世紀を超えた発明品ともいべき、
素晴らしき往年の余韻とともに

昭和42年
(1967)
ナガオカトレーディング
03-3479-8181

クリーナーにまで
宿る音に対する情熱

形容するに水戸黄門という風車の弥七といったところか。円滑なレコード再生で考えると、レコード専用のクリーナーは、まさに名脇役だ。その筆頭にあがるのが約40年近くもの間、潤し続けるナガオカのクリーナーだろう。昭和15年に時計用の部品製作からスタートしたナガオカは、昭和31年にダイヤモンドを先端につけたダイヤモンドレコード針を発売。昭和59年には針の生産が月産100万本に到達するまで、世界中のオーディオファンから、音のナガオカとして讃えられた。こ

の当時から生産を開始していたのが、クリーナーをはじめとするレコード用アクセサリーだった。音に対する考え方を、そのままこのアクセサリーに込められた。あなたの耳でお確かめください。人の記憶のように音も永遠ではありませんが、それだけにナガオカは「音の生命」を何よりも大切にしています。など静寂のなかに燃えたる熱気を感じさせる当時のカタログキャッチコピーには平伏して反省せざるを得ないが、往年のメンテナンス製品が今もなお、販売され続けているとは、なんと嬉しい限りではないか。



カタログに掲載された、アクセサリー群を集合写真で魅せる（これだけあるゾのアピール）ページは昭和の当時、よく採用されていた手法だ。



クリアートン558
レコード用クリーニングスプレー。クリーニング効果が高く、静電気の発生も防ぐ。スプレーの香りをかぐとあの頃へタイムスリップする。価格1620円。



ハイクリン801
針飛びや音質劣化の原因となる針先の汚れを取り除く洗浄液。ハイクリンで針先をキレイにしておけば、日々クリアな音を約束。価格756円。



アルジャント118
ファン必携のレコード用クリーナー。超極細な最高級ヘルペット使用で、レコード溝に詰まった小さなゴミ、埃の除去も楽々。価格1296円。



昭和42年
(1967)
オーディオテクニカ
お客様相談窓口
0120-773-417

いい音への入口
カートリッジを変えてみよう。1枚のレコードが、さまざまな音に語りだす。



AT-35X
昭和42年に発売されたVM型カートリッジの初号機。



AT-VM35
昭和45年発売のオーディオテクニカを代表する銘カートリッジ。



AT150E/G
昭和54年のAT100シリーズのひとつで、低損失パラトイダル発電系を搭載。



当時のカタログに掲載された「いい音への入り口」のコーナーが、最新モデルにもアップデートしながら昭和をいまだに。



VM760SLC
無垢特殊ラインコンタクト針採用の最新フラッグシップ。レコードの溝に刻まれた音の情報を余すことなく引き出してくれる。上品で優雅な音をぜひ！価格8万6400円。



VM540ML
無垢マイクロニア針を採用した最新VMカートリッジの標準形。針先の曲率半径が不変で低歪みが特長。迫力ある生のライブ表現にも最適。価格3万4560円。

レコード文化を根底から支えるアクセサリとして欠かせないのが、カートリッジと呼ばれるレコードの針だ。高セパレーション、広帯域再生、優れたトラッキングが可能と、フアンの間で定評のあるVM型カートリッジが誕生したのは昭和42年のこと。

カートリッジ製造からスタートしたオーディオテクニカが、レコードの音溝の波を忠実に電気信号に変換するため、左右のマグネットをV字に配置する理想的なVM型を実現した。その後、VMには派生型がいくつも生まれ、厳密に言えばVM初号機「A-T-35X」の系譜は「A-T-35X」から50年続く「A-T-35X」の系譜は「A-T-35X」で一旦途絶え、昨年発売されたVM7600、500、6000シリーズは1979年登場のAT100シリーズが直接の祖となるが、大局的には「A-T-35X」から50年続くVMの思想は今も脈々と受け継がれているのだ。

済ますことのできない、
潤し続けてくれる、
オーディオ界のロングセラー。
その実力をたっぷりと再考察！

文 下川冬樹

昭和残響伝

昭和45年
(1970)
パナソニックお客様
相談センター
0120-878-365

初代設計時点での
圧倒的な完成度の高さ



SP-10
1970年発売の世界初ダイレクトドライブ方式採用ターンテーブル。優れた性能で愛好家を魅了し、そのメロディを広め、テクニクス陣連の契機に。



SL-1200
1972年登場のダイレクトドライブ方式ターンテーブルの普及モデル。トーンアーム一体型の筐体はさらにコンパクト化され、使いやすさ重視の設計に。

レコードブーム復活の今、ターンテーブルにも熱視線が注がれているが、その命ともいえる高い回転とピッチ精度を誇るダイレクトドライブ方式の先駆者が、昭和45年発売のテクニクス「SP-10」だ。その後、昭和47年に普及モデル「SL-1200」が登場し、'08年「SL-1200MK6」まで累計350万台以上の販売を記録。レコード文化を育ててきたが、突如、MK6で系譜は一旦途絶え、昨年6月の限定発売で予約開始30分で完売した「SL-1200GAE」まで復活を待たねばならなかった。その後、ファンの熱意に応じる形で限定モデルとほぼ同仕様のレギュラーモデル「SL-1200GR」がリリース、この5月には新たなスタンダードモデルとして「SL-1200GR」がデビューと弾みがつく。レコードを嗜みなおすなら今を思い



テクニクスSL-1200GR

SL-1200Gを継承したスタンダードモデル。回転制御のロジックや回路は同じまま、ダイレクトドライブモーターを合理化し、シングルローター仕様にするなどでコストダウンを実現。価格15万9840円。5月19日発売。



最新モデルまで反映されてきたその佇まい。デジタル時代のいま、いちいちアナログ操作が必要な本機が存在が眩しい。

昭和54年
(1979)
ソニーマーケティング
物相談窓口
0120-777-886

音楽をより自由に
解放してくれた時代の寵児



初代ウォークマンの見た目が昭和です。すてい！ソニーらしいライフスタイルを一新させる革新的商品提案の姿勢は今も同社受け継がれる。



初代ウォークマンの製品発表会で行われたデモンストレーション。短パンシャツに膝パッド装着のスケボースタイルが懐かしい。

初代ウォークマン TPS-L2
角ばったフォルムに、肉厚ボディが、今あらためて見ると野暮ったくも懐かしくも見えるが、これが当時の最先端だった。

昭和生まれのモノマガ世代にとっては説明不要だろう。昭和54年にソニーが誕生したときの衝撃は今も忘れられない。ウォークマン、それまでスピーカーの前から流れてくる音を聴くしか術のなかった音楽を、容易く外に持ち出して気軽にいつでも楽しむ夢を実現してくれた。音楽を自由に解放し



ソニー/NW-WM1Z

新規格のヘッドホンバランス端子を搭載し、ソニーの技術ノウハウを結集させた史上最高品質の「ウォークマン」。モバイル音楽を圧倒的な高みへと導く。オープン価格(実勢32万4000円前後)。

てくれた懐かしさによって命脈の存在をた。この懐かしさを体感できない、スマホ時代の音楽がなんともおもしろくない。メロディは方セットアップからCD、MP3

ミニディスクです。懐かしい、内蔵メモリと時代に応じて変遷、音源も今やCD音質を超えるハイレゾへと進化。初代と最新モデルの角ばった外観に相通するところを感じられるのは懐の極みだが、音楽をより快適により身近に感じさせる楽しみは、ウォークマンから引き継がれていることに依然として変わりはない。